

## 616 抗サイログロブリン抗体、抗ペルオキシダーゼ抗体の高感度ラジオアッセイによる測定—橋本病の診断における有用性

笠木寛治、高坂唯子、御前 隆、宮本信一、小西淳二(京都大学核医学科)

血中サイログロブリン抗体およびマイクログロブリンの測定には従来より抗原感作血球またはゼラチン粒子凝集反応による測定が行われてきた(各々TGHA、MCHA)。最近高感度ラジオアッセイによる測定が可能になったので(各々TgAb、TPOAb)、橋本病の臨床診断におけるこれら抗体の有用性を検討する目的で、針生検により得られた病理組織像との比較を行った。びまん性甲状腺腫を有する108例における測定成績と組織像との関係よりTGHA、TgAb、MCHA、TPOAb陽性を基準とした場合の橋本病診断の正診率は各々60.2、96.3、73.3、80.5%であった。橋本病の診断にTgAbの測定は極めて有用であった。

## 617 Receiver Operating Characteristic(ROC)解析を用いた腫瘍マーカーの正診率に関する検討

濱政明宏、末廣 美津子、木谷 仁昭、濱田 顕、村上 稔、福地 稔(兵庫医大、核)

従来の腫瘍マーカーの評価は、カット値により陽性と陰性に区別して評価されてきた。今回我々は、悪性疾患における陽性率と良性疾患における偽陽性率を基にROC解析を行うことにより、腫瘍マーカーの臨床的意義を再検討した。対象は、膵・胆嚢の悪性疾患および良性疾患患者で、腫瘍マーカーとしてCEA、CA19-9およびSpan-1を用いた。その結果、ROC解析におけるArea under the concentration curve(AUC)を指標として評価した場合、単独測定でのCEAは0.661、CA19-9は0.836、Span-1は0.863でSpan-1が最も優れていた。また、2項目の組合せでの評価ではAUCは、CEA & CA19-9で0.816、CEA & Span-1で0.841、CA19-9 & Span-1は0.833となり、また、3項目の組合せでは0.837と算出された。以上の結果から、膵・胆嚢の腫瘍マーカーとしてはSpan-1またはCA19-9による単独測定で十分であるとの結論を得た。

## 618 肺癌における腫瘍マーカーとしての血中サイトケラチン19測定法CYFRA 21-1 IRMAに関する検討

村上 稔、濱田 顕、木谷仁昭、末廣美津子、前田真紀子、福地 稔(兵庫医大、核)

肺癌の腫瘍マーカーとしてのCYFRA 21-1 IRMA につき基礎的ならびに臨床的検討を行った。本法の測定感度は0.3 ng/mlで、再現性、希釈試験、回収試験等の基礎的検討成績は、ほぼ満足できる結果であった。

本法のCut off値をROC curveで求めたところ1.6ng/mlで、健常人47名中3名(6.4%)、良性肺疾患患者30例中9例(30.0%)が偽陽性を示した。これに対し肺癌患者では、50例中31例(62.0%)が陽性で、組織型別では扁平上皮癌84.6%、小細胞癌66.7%、大細胞癌57.1%、腺癌44.4%が陽性であった。stage分類別の陽性率はstage I が50.0%、II が50.0%、III 61.9%、IV が76.9%であった。以上の成績から、本法は肺癌の腫瘍マーカーとして臨床的に有用と考えられた。

## 619 T P S A IRMAキットによるTPA測定値の検討

小堺加智夫、高橋秀樹、高野政明、中込俊雄、三浦慶和(東邦大森病院R I)、津布久雅彦、木暮喬(東邦大第一放科)、佐々木康人(東大放科)

Bjorklund らにより腫瘍関連物質として同定されたTPAは、現在ポリクローナル抗体を用いて測定されているが、今回新たに、M3モノクローナル抗体を用いてTPA分布のみを特異的にかつ高感度に測定するキットとして注目されている。今回、我々は本キットを使用する機会にキットの性能評価のため、一連の基礎的検討ならびに若干の臨床的検討を行った。その結果、測定条件は厳守すべきであったが、反応は速やかに進み、再現性、希釈試験、回収試験、交叉試験、相関ともに良好であった。一方、臨床成績は更に症例を重ねて報告したい。

## 620 IRMA法による血漿活性型レニン濃度測定法に関する検討

尾森春艶、河中正裕、樽岡陽子、入倉聡子、杉本佳則、福地 稔(兵庫医大、核)

近年、モノクローナル抗体を用いたヒト活性型レニン濃度を測定する方法が注目されている。今回、私たちはビーズ固相one step IRMA法による血漿活性型レニン濃度測定法に関し検討した。本法の最小検出濃度は0.5pg/mlと従来のtwo step IRMA法での2.5pg/mlに比べ優れており、回収試験、希釈試験、再現性等の基礎的検討成績も満足できる結果が得られた。健常人における空腹時安静臥位30分後の測定値は平均10.7±4.3pg/ml、随時立位～坐位2時間後の測定値は平均16.4±8.4pg/mlで随時立位～坐位2時間後で有意(p<0.01)に高値を示した。また従来のtwo step IRMA法との比較では相関係数  $r=+0.986$ 、 $y=0.87x-0.80$ と良好な相関関係が得られた。

## 621 リアグノスト ラミニンP1の基礎的及び臨床的検討

酒谷 昌宏、石田 晃、山本 英嗣

(ファルコバイオシステムズ イムノ研究所)

ラミニンは基底膜の非コラーゲン部の主要構成成分で細胞の分化・増殖、基底膜の付着などの重要な作用を有し、肝の繊維化のマーカーの一つとして数えられている。さらに糖尿病での血清ラミニン濃度の上昇は、腎障害や眼障害を反映しているとの報告もあり、糖尿病との関連についても注目され始めている。今回、我々は新しく開発されたリアグノスト ラミニンP1キットを用い、基礎的検討を行い、また糖尿病患者のデータから臨床的有用性を検討した。基礎的検討では全てにおいてほぼ満足できる結果が得られ、また健常人51例の測定値は1.28±0.19 U/ml、糖尿病患者86例の測定値は1.55±0.36 U/mlであり、両者の間で有意な差が認められた。